

川村 雅則 ゼミⅡ

KAWAMURA Masanori Seminar II
○参加学生数 7名 (うち履修者3名)

介護・介護労働をめぐる問題と課題

◆ 研修地——主として札幌市



川村 雅則
経済学科
准教授

研修期間・研修先

4月～7月 札幌市内の特養老人ホーム施設を訪問し、施設長や職員から聞き取り
7月～8月 札幌市内の特養を中心に労働者アンケート調査を実施
9月～11月 その他の特養で、同じく労働者アンケート調査を実施
10月 調査結果をふまえてシンポジウムを開催。
12月 インゼミ大会 (@ 福岡大学) で調査結果を含む研究成果を報告



福岡大学にて

◆ 研修目的

危機的状況にあるとされる介護現場・介護労働の実態を明らかにし、その改善のために何が求められているのか。わが国の社会保障制度の現状と課題を視野にいれて考えること。

◆ 総括

医療、年金そして介護など、わが国社会保障制度のほころびが深刻化しつつある中で、私達のゼミでは、介護・介護労働の現状に焦点をあてた調査研究プロジェクトをこの1年間、展開してきた。具体的には、特別養護老人ホームで働く労働者や施設長からの聞き取りを重ねつつ、大規模なアンケート調査を実施した（アンケートは、最終的には、1148人の介護職、124人の施設長から回答を得た）。学生に研究者としての力量・ふるまいを求めるといふ、いささか強引とい

うか無理を承知で行った今回のプロジェクトではあったが、日曜祭日を返上で作業してきたこともあり、危機的状況にある介護現場の実態と課題を明らかにすることに一定程度成功した。その成果は、新聞やテレビ等でもとりあげられ、例えば、『北海道新聞』(08年09月01日付)では、「厳しい環境で質低下の懸念/年収300万円以下74%、「社会的評価低い」65%/現場から切実な訴え」という見出しとともに私達の調査結果が報じられた。その後も、シンポジウム（「介護地獄はもうごめん!!介護に笑顔と希望を!!」）や、インゼミ大会等を通じて、社会に対して問題提起を行ってもきた。調査研究を通じた社会貢献という点もさることながら、この取り組みに参加した学生の成長を強く感じる事が出来た、有意義な一年であった。

学生研修記



林 城治
経済学科3年
別海高校出身

日本の介護現場の現状について

私達のゼミでは、この1年間、主として介護労働の現状について学習してきました。介護現場の行き詰まりは介護保険制度の財源不足からきています。高齢化が急速に進んでいるにもかかわらず、財源を圧縮しているために、介護労働者の労働条件・処遇は低いままになっているのが現状です。実際に施設を訪問して聞き取り調査を行ったところ、低い待遇に不満を持っている職員の方が多いということがわかりました。また仕事に見合わない待遇のため、介護の現場を離れてしまう人が後を絶ちません。人手不足の状況では、利用者に対するサービスも悪化し、最終的に困るのは介護を受ける私たちの側だと感じました。実際に施設を訪問することで現場の生の声を聞くことができ、日本の福祉の弱さを痛感した1年でした。また世代の違う沢山の方たちとお話をすることで自分自身大きく成長できたと思います。



介護労働者からの聞き取り

特養施設見学

施設見学

特養施設で勉強



インゼミの風景



シンポジウム

検討中

介護労働をめぐる問題について

近年、介護の現場では労働者の低賃金、長時間労働、人手不足、また利用者の負担増や介護難民など多くの問題が発生しています。僕らのゼミでは、介護労働者に焦点を当てて介護施設の訪問やアンケート調査を行い、介護の現状を明らかにしようとしてきました。施設訪問やアンケートの自由回答では、労働者の生の声を聞くことができ、過酷な労働や低賃金、将来に対する不安などの意見が多く見受けられました。一方で、そのような環境下にあいながらも献身的に介護という仕事に携わる人が少なくないということがとても印象的でした。しかし、施設の運営や労働者の生活はすでに限界ぎりぎりにまで達しているとのこと。財源等の問題があり、事態の改善は容易ではないのかもしれませんが、現行の制度は介護労働者にかかる負担があまりにも大きいと感じました。



辻 泰平

経済学科3年
函館ラ・サール高校出身